

お札と切手の 博物館 ニュース

Banknote and Postage Stamp
Museum News

Contents

特別展「乙百円誕生の軌跡
日本人が初めて肖像をデザインしたお札」より
「乙百円」以降のお札における聖徳太子の肖像

シリーズ 世界のお札と切手をたずねて③

2020/10/1
Vol. 46





令和元年度 第2回特別展「乙百円 誕生の軌跡 日本人が初めて肖像をデザインしたお札」より

「乙百円」以降のお札における 聖徳太子の肖像

新型コロナウイルス感染拡大の影響により会期短縮となりましたが、令和元年12月17日(火) から令和2年2月27日(木) まで、特別展「乙百円 誕生の軌跡 日本人が初めて肖像をデザインしたお札」を開催しました。

昭和5(1930)年に発行された日本銀行兌換券乙100円(以下、乙100円券)は、初めて聖徳太子の肖像が採用されたお札として知られていますが、全ての工程を日本人が手がけた初めてのお札でもあり、今回の展示では、日本の技術者たちがお札を完成させるまでの道のりを時代背景や海外の影響などとともに紹介し、乙100円券に用いられた日本独自の図柄や当時の最新技術についてお伝えしました。

ここでは、展示ではあまり触れられなかった乙100円券以降のお札について、聖徳太子の肖像がどのように用いられてきたのか、発行時の背景などを通してお伝えします。



展示風景より

繰り返し踏襲された肖像

乙100円券の発行後は、戦局の悪化などにより新たに肖像を彫刻する余裕がなく、従来の原版を流用し、肖像や図柄を踏襲したお札が繰り返し発行されました。

日本銀行券い100円(図1)は、管理通貨制度の移行に伴い、題号を日本銀行兌換券から日本銀行券に改めるなど新しい様式で発行されましたが、肖像には引き続き聖徳太子が採用されています。

その翌年に発行された日本銀行券ろ100円(図2)は、非常準備用として製造されたお札です。終戦直後の物資不足の中、用紙や印刷自体も簡略化されたもので、肖像は、かつての聖徳太子像とは大きくかけ離れたものとなりました。その後、インフレーションがさらに加速し、政府が金融緊急措置として預金封鎖を発効したため従来のお札が無効となり、新円が発行されるまで、日本銀行券い100円に証紙を貼ったお札も暫定的に発行されました。さらに、この原版は、後に発行される日本銀行券A100円(図3)においても転用されます。

終戦後に一新されたお札のシリーズであるA券の肖像や図柄の決定は、GHQ(連合国軍最高司令官総司令部)の監督下にあります。当初は、歴史上の人物の代わりに仏像を用いるという大蔵省の方針により、弥勒菩薩が100円券に採用される予定でしたが、GHQの許可が下りず、製造期間が逼迫していたため、図案を作り直す余裕がなく、日本銀行券い100円に新円のマーク(天平雲と桜花を描いた赤い模様)を加刷したものが新札として代用されました。



図1 日本銀行券 い100円 昭和19(1944)年



図2 日本銀行券 ろ100円 昭和20(1945)年



図3 日本銀行券 A100円 昭和21(1946)年

*枠内が加刷部分

戦後も採用され続けた肖像

終戦後に発行されたお札は、簡易な印刷によって大量生産されたことにより偽造の恐れもあったことから、本格的な凹版印刷による新しい様式のお札についての検討がすぐに開始されました。

昭和21(1946)年、政府は新たな肖像の候補者として20名をGHQに申請し、12名の人物が承認されていますが、この中には、聖徳太子を始め、岩倉具視や板垣退助といった明治の元勳たちのほか、のちの肖像となる福沢諭吉や野口英世、夏目漱石といった文化人の名前も含まれています。これらの多くの候補者の中から5名に絞られますが、元印刷局長で大蔵次官の山田義見やまだよしみの意見により、1000円券・500円券・100円券の三券種の肖像を聖徳太子とすることが決定されました。当初は500円券から発行される予定で準備が進められていましたが、急速な経済成長によって高額券の需要が高まったため、1000円券(図4)が先に発行されることとなり、500円券の額面などを変更した図案が採用されました。その後、サンフランシスコ講和条約の発効によりGHQの許可が不要となり、500円券と100円券の肖像には、岩倉具視と板垣退助が選定され、日本のお札に初めて政治家の肖像が採用されます。結果として、聖徳太子は再び高額券の顔となりました。

戦前には、政府の方針により天皇家に貢献した人物として用いられてきた聖徳太子の肖像ですが、戦後は復興とともに、文化人や明治の元勳たちとともに候補に挙げられるようになり、聖徳太子の人物像に対する捉え方も変化していることがわかります。

新たな高額券の顔として

昭和30年代になると日本の経済は飛躍的発展を遂げ、取引の大口化などに対応するため、更なる高額券の需要が高まり、5000円券(図5)と10000円券(図6)が導入されました。

両券種の肖像は同時に審議され、歴代の天皇、皇祖神、仏像、明治期の政治家や小説家、江戸期の学者など約60名もの候補者の中から5名に絞られました。選考過程では、10000円券に明治天皇、5000円券には昭憲皇太后が第一候補に挙げられていたほか、藤原鎌足や松方正義の名前もありましたが、どちらも聖徳太子を肖像とする第四候補が最終的に採用されることとなり、券種を区別するため、お札の大きさや色彩、肖像の配置を変えて印刷されました。

これらは、かつてない高額券であったため、インフレーションの促進を懸念する声もあり、発行までは非常に難航しました。そのため、当初は10000円券から先に発行予定であったところを急遽変更し、5000円券が先行して発行されたという経緯があります。

このように、当初は違う人物が肖像の候補に挙げられるなど、非常に多くの候補者がいたにもかかわらず、最終的には両券種ともに聖徳太子の肖像が採用されましたが、その理由について明確な記録は残されていません。

特に、高額券の導入については、インフレーションが助長されたり、かえって不便をきたすことのないよう慎重に検討されてきたことから、新しいお札を発行する際に人々の混乱を招くことのないよう、長く愛好されてきた聖徳太子の肖像を用いることで、国民が安心してお札を使うことができるよう配慮されたという事情も考えられます。



図4 日本銀行券 B1000円
昭和25(1950)年



図5 日本銀行券 C5000円
昭和32(1957)年



図6 日本銀行券 C10000円
昭和33(1958)年

昭和のお札の代名詞

聖徳太子の肖像を用いた5000円券と10000円券は、四半世紀以上にわたって発行され、戦後ももっとも発行期間の長いお札となりました。戦前も含めると、昭和5年に初めて肖像に採用されて以来、実に50年以上もお札の顔を務めたこととなります。特に、10000円券(図6)の発行後数年間は、流通する三券種のお札の肖像がすべて聖徳太子だったこともあり、昭和のお札の代名詞としてのイメージが浸透していきました。

明治期のお札には、神功皇后(図7)や、大黒天(図8)のように、同一の肖像や人物が全券種に用いられていたことがありますが、聖徳太子のように二券種の顔として長く用いられた人物は他におらず、唯一の事例です。

聖徳太子から、新たな肖像へ

このように長く用いられてきた聖徳太子の肖像ですが、偽造対策やATM等の機器の普及に対応するため、昭和59(1984)年に改刷されることとなり、惜しまれつつ姿を消しました。

新しい肖像には、従来の方針を踏襲する案と、新たに文化人を採用する案の二通りがあったといわれており、聖徳太子も再び候補に挙がりましたが、最終的には、福沢諭吉が新しい10000円券(図9)の顔となりました。

それまでのお札には、戦後新たに採用された明治期の政治家たちとともに聖徳太子の肖像が用いられてきましたが、この改刷により、新たな三券種の肖像は、すべて文化人となりました。これは、当時の世界的な傾向であり、民間の調査でお札の肖像に文化人を好む人が多かったことから、文化人の肖像が一般に受け入れられやすいと判断されたことによるものです。

かつて何度も肖像の候補となり、不採用となった経緯がありながら、西洋の文化や政治経済に精通し、文化人としての功績を多く残した福沢諭吉が肖像に採用されたことは、高度経済成長を遂げ先進国となった日本にとって、ふさわしい人選であったといえます。

聖徳太子という肖像の特異性

聖徳太子は、日本で最も多く7回もお札に採用された人物として知られていますが、次いで、菅原道真が6回、武内宿禰・和気清麻呂が5回、藤原鎌足が4回と、聖徳太子だけが突出して多いわけではないことがわかります。しかしながら、聖徳太子が肖像として異彩を放っているのは、歴史上敬愛すべき人物として戦前のお札に採用されていながらも、これらの軍国主義を象徴する人物を認めないというGHQの方針による採用却下の対象から外れ、かつ、戦後も引き続き肖像の候補であり続けたという点です。

時代の価値観の変遷とともに、お札の肖像選定の基準も変化していきなかに、聖徳太子がお札の肖像に選定され続けたのは、政治家や文化人として優れた側面を合わせ持つことが生前の業績から伝えられるなど、その時々々の価値観に沿うような多面性を持つ人物像によるものといえます。

長きにわたり高額券の顔であり続けた聖徳太子は、先進国として成長を遂げた日本を見届け、ようやくその役目を新たな肖像へと託したのです。

(学芸員 佐藤 さおり)



図7 改造紙幣 5円
明治15(1882)年



図8 日本銀行兌換銀券 旧1円
明治18(1885)年



図9 日本銀行券 D10000円
昭和59(1984)年

世界の お札と切手を たずねて③

●カンボジア

世界遺産と日本とのつながり



上：アンコール・ワットを描くお札 2004年
下：アンコール・トムの四面仏を描くお札 1995年



プレア・ヴィヘア寺院を描くお札
2007年



「プレア・ヴィヘア寺院世界遺産登録1年」記念切手
2008年

こうした遺跡が描かれる一方、カンボジアのお札には、日本にまつわるデザインも見られます。

500リエル札の裏面に描かれているのは、カンボジアの重要な幹線道路で、メコン河を渡る2つの橋です。これらは、日本のODA(政府開発援助)の無償資金協力(資金贈与)により、メコン河で分断された輸送・通行ルートを改善するため、建設されました。

中央に大きく描かれているのが、2001年に開通した橋で、日本とカンボジアの友好を深めるために「きずな橋」と名付けられました。

右側に描かれた欄干には、カンボジアの国旗とともに日本の日の丸もデザインされており、外国紙幣に日本の国旗が登場する珍しい例ともなっています。

左側には、2015年に開通した「つばさ橋」が見えます。2羽の鳥が手を取り合い翼を広げているように見えることから、カンボジアと日本の更なる関係の発展を祈って「つばさ橋」と名付けられました。

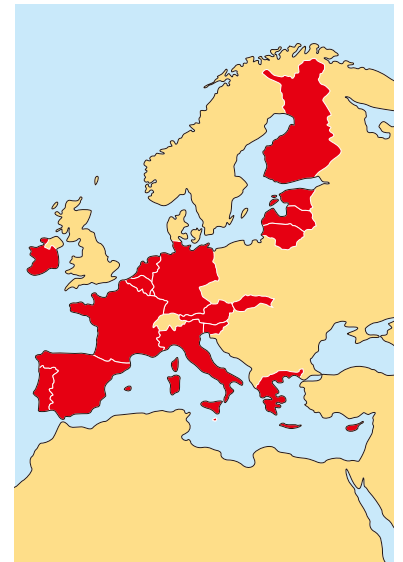
これら2つの橋は、カンボジアの大動脈であるとともに、日本との協力・友好関係のシンボルとして、お札に登場しています。



「つばさ橋」(左部分)、「きずな橋」(中央)とその欄干の日本の国旗(右)を描く500リエル札
2014年

●EUの通貨同盟 ユーロ

オーストリア、ベルギー、フィンランド、フランス、ドイツ、ギリシャ、アイルランド、イタリア、ルクセンブルク、オランダ、ポルトガル、スペイン、スロベニア、キプロス、マルタ、スロバキア、エストニア、ラトビア、リトアニア



10ユーロ(表裏)
左: 2002年発行 右: 2014年発行
上: ロマネスク様式の建造物(表面)
下: 同様式の橋とヨーロッパの地図(裏面)

ユーロは、EU(欧州連合)の共通通貨として、2002年1月1日から現金の流通が開始されました。現在では、EU加盟国27か国のうち19か国のほか、加盟国以外の国や海外領土でも使われています。

一般に、お札には、それぞれのお国柄を生かした独自のデザインを用います。しかし、ユーロのような共通のお札の場合には、公平性を保つために、特定の国を表さない、主役を設定しないデザインを採用しています。表面には、架空の窓や門を描いてヨーロッパの理念「自由と協力」を表し、裏面には、ヨーロッパと他地域とのコミュニケーションを表す架空の橋を描いています。これら「窓」と「橋」は、額面ごとにロマネスク、ゴシック、バロックなど異なる様式が採用されており、ヨーロッパの建築様式の発展の歴史も表すものとなっています。

ユーロのコインについては、片面が共通デザインで、もう片面は各国独自のデザインが可能です。しかし、お札はすべて共通デザインであるため、それまでの個性ある19か国のお札が見られなくなってしまったのは残念です。



ユーロとともに発行された切手
オーストリア 2002年1月1日発行
左: 1ユーロコインと参加国の地図
右: オーストリアの旧通貨シリングのお札やコインのデザイン(裏面)



ユーロ紙幣をデザインした切手
ドイツ 1998年

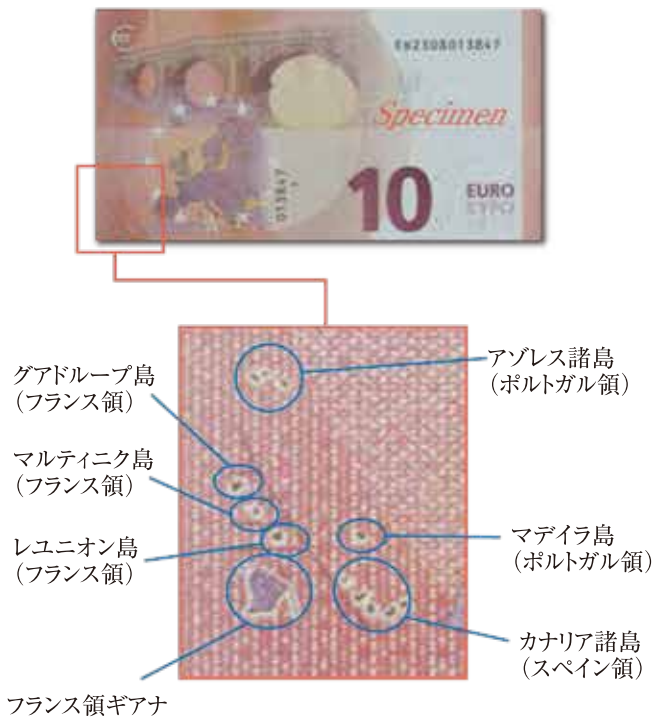


ユーロコインをデザインした切手
ルクセンブルク 2001年

お札に込められた情報

①ユーロ圏の表示(裏面)

本国だけでなく、ユーロを使う海外領土の島も描かれています。



②お札の印刷場所

お札に印刷された記号は、ユーロ紙幣の印刷を担う各国の中央銀行や印刷会社を表しています。

日本のお札は印刷局が一手に担っていますが、ユーロの場合は17つの場所で印刷されているのです。

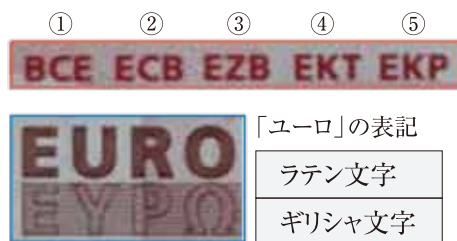


D	ポーランド印刷会社
E	フランス印刷会社
F	フランス印刷会社
H	イギリス印刷会社
J	イギリス印刷会社
M	ポルトガル印刷会社
N	オーストリア印刷会社
P	オランダ印刷会社
R	ドイツ印刷会社

S	イタリア銀行
T	アイルランド中央銀行
U	フランス銀行
V	スペイン印刷会社
W	ドイツ印刷会社
X	ドイツ印刷会社
Y	ギリシャ銀行
Z	ベルギー国立銀行

③「ユーロ(EURO)」と「欧州中央銀行(ユーロ発行元)」の表記

2002年のユーロの登場直後と、2017年に発行されたお札を比べてみると、表記が増えています。当初12か国だったユーロ加盟国が19に増え、独自の言語や文字の表記も追加されたためです。



①～⑩欧州中央銀行の頭文字

- ①フランス、イタリア、ポルトガル、ルーマニア、スペイン
- ②チェコ、デンマーク、オランダ、イギリス、ラトビア、リトアニア、スロバキア、スロベニア、スウェーデン
- ③ドイツ
- ④ギリシャ
- ⑤エストニア、フィンランド
- ⑥ブルガリア
- ⑦クロアチア
- ⑧ハンガリー
- ⑨マルタ
- ⑩ポーランド

(学芸員 土井 侑理子)

COMING SOON!
展覧会予告

令和2年度 秋の特集展

富士山

お札・切手・旅券に描かれた日本のシンボル 象徴

令和2年 10 / 13(火) ~ 11 / 29(日)



富士山は日本最高峰の山であり、日本を象徴する山として、国内外を問わず多くの人々に親しまれています。その優美な姿は、お札や切手などのモチーフとして繰り返し用いられてきました。私たちがふだん使用しているお札の裏面にも、日本の象徴として富士山が描かれていますが、令和6(2024)年発行予定の1000円券の裏面や本年(2020年)発給が開始された旅券のデザインにも富士山をメインモチーフとした葛飾北斎の『富嶽三十六景』が採用され、話題を集めました。

また、切手においても、富士山を描いた芸術作品や美しい風景写真などを用いたものが数多く発行されていますが、こうした切手やお札、旅券などには、作品の芸術性はそのままに偽造防止効果が付与され、国立印刷局の高い技術が使われています。

本展では、富士山を題材に国立印刷局の技術の粋を集めたこれらの製品とともに、多種多様な富士山の姿、デザインをご紹介します。



日本銀行券 E1000円 裏 平成16(2004)年



旅券 査証ページ デザイン

ご利用案内

入館無料

開館時間: 9:30-17:00
休館日: 月曜日(祝日の場合は翌平日)
年末年始、臨時休館日
※団体見学受付は、当面の間休止します。

交通

JR京浜東北線「王子駅」(中央口)下車 徒歩3分
東京メトロ南北線「王子駅」(1番出口)下車 徒歩3分
都電荒川線(東京さくらトラム)「王子駅前」下車 徒歩3分
*駐車場はありません。

常設展

偽造防止技術の歴史・印刷技術・製紙技術
偽造防止技術体験コーナー(休止)
重要文化財 スタンホープ印刷機
お札の移り変わり/世界のお札/
切手の移り変わり/世界の切手/
国立印刷局の歴史/世界のめずらしいお札/
お札の芸術(休止)
*特別展開催時は一部展示の変更があります。



独立行政法人 国立印刷局

お札と切手の博物館

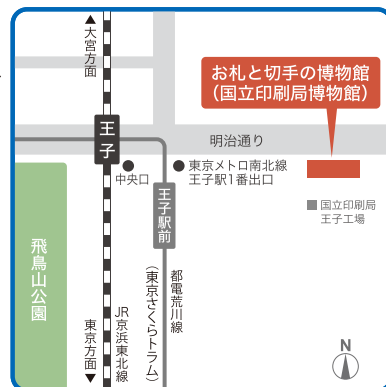
〒114-0002 東京都北区王子1-6-1

TEL.03-5390-5194

<https://www.npb.go.jp/ja/museum/>

お札と切手の博物館

検索



発行: お札と切手の博物館(国立印刷局博物館)

発行日: 令和2年10月1日 ©2020

本書掲載の内容を許可なく複製、複製、転載することを禁じます。

※この冊子は再生紙を使用しています。